

笑って生きる

上うえ廣ひろ榮えい治じ

暗く殺伐さつぱつとしたニュースが続きます。消えた年金記録、サブプライム・ローン問題、道路特定財源と税金の無駄遣い、混乱するガソリン価格、後期高齢者医療制度への不安と不満、増加するワーキング・プアー、相次ぐ花壇荒らしや公園の白鳥殺し……。世の中から、すっかり「笑い」が消えてしまったように思えてなりません。

そこで思い出したのが、NHKの朝の連続ドラマ「芋いもたこなんきん」のモデルにもなった人気作家、田辺聖子さんご夫婦のことでした。田辺さんは三十六年連れ添って亡くなった夫（田辺さんのエッセーでは「カモカのおっちゃん」として登場）のことを、こんなふうに書いています。

「もう、おっちゃんといったら、いつも笑ってばかりやわ」

「それで結構やないか。人間何のために生きてると思うか。笑うためやないか」

これは四十年以上も昔の、二人が出会って間もない頃の会話です。当時の田辺さんは「感傷旅行（センチメンタル・ジャーニー）」で芥川賞を受けたばかりの「時の人」で、髪振り乱して原稿用紙に取り組む毎日だ

ったでしょう。一方、彼女と再婚することになる「おっちゃん」は、奥さんを亡くしたばかりで、四人の子どもと両親、それに弟と妹の大家族で暮らす下町の開業医。ここが痛い、あそこが苦しいと訴える患者たちに囲まれています。

ふつうに考えたなら、二人とも笑ってなどいられない状況です。笑うことなどまるで忘れた家庭になっていたとしても不思議はありません。でも、田辺さんは「いつも笑ってばかり」で、相方のおっちゃんはいえは、これも「人間何のために生きてると思うか。笑うためやないか」とすましています。

このおっちゃんの言葉には、驚くべき強い意志と確かな実践力がずしりと沈み込んでるように思われます。「常に笑いとともにあるう、笑って生きよう」という確たる信念を、日々の暮らしの中でそれを実践している人からでなければ、とうてい出てこない言葉です。

もちろん、この二人の言う「笑い」とは、人を蔑み馬鹿にした冷笑や嘲笑い、ほろ苦い苦笑や失笑、計算ずくの作り笑いや追従笑いなど、いわば「陰性の笑い」ではありません。楽しかったり、嬉しかったり、おかしかったりしたときに、自然に心の底からわき上がる愉快的感情の表現、「陽性の笑い」とでも言うべきものです。

とすれば、「笑うために生きる」人であることは、それほどたやすいことではないのです。なぜなら、「笑うために生きる」人は、いつでも、何に対しても、楽しさやおかしみを見出すことができる「視線」を持ち続けている人でなければなりません。しかも、いつでも笑うことができるような精神状態になければならないのです。

では、何に対しても楽しさやおかしみを見出すことができる「視線」とは何でしょうか。それは「人間に對する強い関心と愛情」に裏付けられた視線だと、私は思います。なぜなら、笑いはきわめて人間的なもの

であるからです。

その反対に、人間に無関心な人、例えば、硬直した原理主義者や偏頗へんぱな教理をかざす人、非人間的な権力を振るう人や金銭ばかりに執着する人、自分を偉いと思ひ込んでいる人や不満と敵意にとらわれた人などは、ほとんど笑顔は見られません。

では、いつでも笑える精神状態とは何でしょう。「精神が自由だということ、心が柔らかいこと」だと私は思います。相手に失礼がないようにと気をつかい、緊張して心が硬直している状態では笑えるはずがありません。しかし、例えば立派な紳士がバナナの皮ですべって転べば笑えます。紳士は謹厳で偉いものだという固定観念から解放されて、心が自由になったから笑いが生まれるのです。

しかし、人間に対する強い関心と愛情と、柔らかく自由な精神をもつても、「笑えない場」というものもあります。宗教や司法の厳肅な場、誰もが悲嘆にくれたり苦しんでいる葬儀場や病院などです。みんなの眼が興奮で吊り上がってしまっている闘争の場でも笑えません。総じて笑えない場とは、厳しく悲しく暗く疲れる場であるように思われます。

その一方で、私たちは「笑いの絶えない場」というものも想像できます。それは例えば、車座になって楽しんでる職場のお花見、気心の知れた仲間たちのピクニック、久しぶりに集ったクラス会、結婚披露宴のテーブル、赤ちゃんを囲んだ親しい人たちの輪、一家団欒中の家族などです。もちろん笑いのない家族というのもありますが……。

これら、笑いが絶えない場とは、お互いに「彼も人なり、我も人なり」と認め合った、良好な人間関係が成り立っている場です。すなわち、我が会であるところの「愛和した場」にこそ、笑いが絶えないのだということがわかります。

言い換えれば、「笑うために生きる」ことのできる人とは、彼が関わるすべての人間関係を、愛和した人間関係に作りなすことができる人でなければならぬのです。

さて、このことを、それぞれのご家庭や会友が集う場に重ねてお考えいただきたいのです。私たちの家庭は、あるいは私たちの会場は、笑いが絶えない場になっているでしょうか。それとも、緊張と硬直が支配する、笑いのない厳しいだけの場でしょうか。

もし、前者であれば、そこには真の愛和が成り立っているのです。そうした家庭や会場は、さらなる発展を約束されていると言えるでしょう。しかしもし、後者であったとすれば、少なくとも、我が会の基本中の基本である「愛和」の精神が誤解されているに違いありません。そしてもちろん、「上機嫌の実践」の何たるかもわかっていないと言わねばなりません。

笑いのない集団、つまり愛和なき集団は、たとえそれが血のつながった家族であったとしても、小さなきつかけで簡単に崩壊してしまふ危あやういものだと、私は思っています。

昔から言われるように、まさに「笑う門かじには福来る」なのです。しかも、「一笑一若いっしょういちじやく」(一つ笑えば一つ若返る)で、そのうえ、笑いは病氣に対する自然治癒力しぜんちゆりよくを高め、ストレスには癒いやくし効果が抜群だともいわれます。こう考えてくれば、「笑い」にはいいことづくめです。ぜひ日々の実践にお加えください。

